

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：31303

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K04891

研究課題名（和文）明治時代の地方城下町における名匠の作風形成と弟子たちの継承

研究課題名（英文）A historical study of the technical character of master carpenters at local castle towns and activities of their successors in Meiji period.

研究代表者

中村 琢巳（NAKAMURA, Takumi）

東北工業大学・建築学部・准教授

研究者番号：20579932

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,200,000円

研究成果の概要（和文）：我が国の地方城下町では名建築を数多く手がけた大工棟梁の名匠が誇られ、彼らの建築群は城下町の文化資源として伝わり、我が国の地方色豊かな建築文化の基礎をなしている。こうした地方の名建築は、ほぼ明治時代に集中することも大きな特色である。本研究では東北各地の近代和風建築の調査を通して、地方色を生み出した背景に着目した。伝統技術の伝承、近代独特な地域間交流、郷土の人脈といった視角を、東北各地のフィールドワークとその比較分析を通して抽出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義として「地方色」に着目した近代和風建築である点が挙げられる。いわば日本建築史と郷土史を接続する視点である。さらに、そうした地方色豊かな建築文化が花開いた時代として明治時代に着目することで、学問分野として乖離しがちな近世史・近代史を接続する意義ももつ。さらに本研究は、全国的な建築の歴史では零れ落ちるような、地方城下町で身近に数多く現存する歴史的建造物を、どのような視角から歴史的評価を行うか、その考え方に貢献する。その意味で、現在の文化財保存活用と関わる社会的意義も有する。

研究成果の概要（英文）：In Japan's local castle towns, master carpenters constructed many historical buildings, and their buildings have been handed down as cultural heritage of the castle towns, forming the foundation of Japan's local architectural culture. Another feature of these local masterpieces is that they are mostly concentrated in the Meiji period. In this research, I focused on the background that created the local characteristics for modern Japanese-style architecture in the Tohoku. Through fieldwork and comparative analysis of various areas in Tohoku, we have extracted perspectives such as the tradition of techniques, unique modern exchanges between regions, and local personal connections.

研究分野：日本建築史

キーワード：近代和風建築 明治時代 地方色

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

我が国の地方城下町にはその城下の名建築を数多く手がけた大工棟梁の名匠が誇られる。彼らの建築群は城下町の文化資源として伝わり、現在の文化財保存活用と結びついていることも大きな特色である。そして、こうした地方城下町の名匠を生み出した時代は、ほぼ明治時代に集中する。

本研究は明治時代の地方城下町、とりわけ地方色豊かな東北地方に焦点をあて、名匠と謳われる大工棟梁の個別具体的な研究およびそれらの比較文化史である。こうした地方の名匠とその弟子たちの仕事が、我が国の地方色豊かな建築文化の基礎をなしている。一方で、城下町に集積する歴史的建造物の価値評価に際して、地方色をうみだした背景に関する研究蓄積は少ない。本研究の特色のひとつは、こうした地方色への着目である。つまり、既往の近世・近代職人史研究で論じられることの多い名匠の形成や歴史的建造物は、東京・京都を中心とした中央の展開に着目されがちであった。こうした全国区の職人や歴史的建造物ではなく、地方独自に活躍を遂げ、その地方に作品を残していった人物や作品群を取り上げる。いわば、日本建築史と郷土史を融合する考え方に立脚している。同時に、現存する作品が多い明治時代という時代性について、近世・近代の連続そして変化という両面からも迫りたい。

2. 研究の目的

明治時代の名匠の事績と作品の調査分析について、東北各地の城下町を対象として、具体的なケーススタディを集成する。そのうえで、それらの共通項あるいは多様な地方色をうみだした明治建築の時代性を考察していく。城下町を構成する歴史的建造物は、寺社建築から武家屋敷、町家、そして近代建築など多様である。従来の日本建築史研究では、これら様式や工法が異なる建築ジャンルを、領域ごとに個別に研究対象とする傾向が強い。あるいは地域史においても、これら建築ジャンルが並列的に記述され、これらを一体的に分析する視点は希薄だと考えられる。本研究では、具体的な城下町の中で、多様な様式の歴史的建造物を把握することで、ジャンルごとに分断されがちな建築史研究の新しい分析方法の検討にもつなげたい。

3. 研究の方法

本研究の方法の第一は、現存する歴史的建造物の実測調査である。本研究は地方城下町に現在も伝わる明治時代の近代和風建築が主な対象であり、現存遺構が多い時代を対象としている特徴がある。加えて、実測調査は研究面で有効であるだけでなく、社会的な意義も高い。それは歴史的建造物の図面・写真・評価という個別の記録化が、文化財保存活用に直結する研究方法であるからである。

またこれら集成した作品群の分析に際しては、個別の建築ジャンルに細分化されない、横断的な分析手法に留意する。寺社、民家、公共建築といった建築ごとの検討を超えて、地方色豊かな建築文化をうみだした背景を総合的に考察する。同時に、近世と近代の時代性を重視した分析を行う。つまり、本研究で検証する作品群は近代和風建築が多く占めるが、それら作品を江戸時代からの伝統を受け継ぐ視点と、近代だからこそその時代背景という両面に目配せしたい。

研究方法として文献調査も取り入れる。特に、近世から近代への技術伝承の論点において、伝来する大工文書の分析は有力である。近世から近代への連続性、あるいは師匠から弟子への技術継承という面において、遺構研究(実測調査)にとどまらず、文献調査も取り入れて進めていく。

4. 研究成果

研究対象とした地域については、東北地方の地方色が浮かび上がるように多様なセレクトを試みた。研究着手初年度から継続して史料調査および歴史的建造物実測調査を積み重ねてきた、弘前(青森県)、五所川原(青森県)、水沢(岩手県)、米里(岩手県)、陸前高田(岩手県)、登米(宮城県)、白河(福島県)といった地域を重視して研究に取り組んだ。これに加えて、函館(北海道)の近代住宅の調査研究もターゲットとして取り入れたことにより、明治時代における北海道の建築文化の重要性にも留意した。以下で、本研究成果で得られた近代和風建築の視角について述べていく。

第一に、明治時代における「江戸時代の建築文化の継承」という視角である。

具体的な研究成果の一つに、岩手県米里に現存する人首文庫・佐伯家住宅の実測調査および文献調査に関するものがある(「旧仙台藩人首の近代和風建築・佐伯家住宅に継承された私塾の空間

特性」2022)。小城下町・米里の武家屋敷を受け継ぐ佐伯家住宅についての考察である。その主屋は明治時代に水沢の大工棟梁が手掛け、幾何学的で銘木を多用した室内意匠から近代和風住宅の視点から評価されるものである。一方で、その平面形式には江戸時代に「私塾」を営んでいた面影が指摘できることを、江戸時代の家相図と明治時代の住宅平面との比較分析、敷地内に残る土蔵「文庫」の存在、さらに論語の文脈と対応する庭園構成から論述した。同様に、江戸時代の建築文化の継承という面で、小城下町・水沢の近代和風建築群の研究成果も発表した（『旧高野家住宅（高野長英旧宅・古稀庵・新座敷ほか）』2023）。旧高野家住宅に加えて、国登録有形文化財・安部家住宅の実測調査成果も踏まえて、水沢城下町における、武家屋敷の独特な近代和風建築への増改築過程について考察した。たとえば、武家屋敷の旧来の平屋建て部分を残しながら、数寄屋を凝らした室内意匠の二階座敷を増築すること、囲炉裏まわりのチャノマをあたかも座敷のように家具・襖絵を凝らして改造する点など、城下町のなかで共通する建築手法を把握した。この武家屋敷の二階建てへの改造は、弘前城下町の武家屋敷群でも確認された。水沢は、明治時代における郷土画家の存在や気仙大工の活躍、偉人の存在から、武家屋敷の明治時代独特な改造が顕著にみられる地方であるが、この視点はある程度、ほかの城下町にも共通する近代和風建築の視角だと想定される。

研究成果の第二は、明治時代の「地域間交流」が建築文化に及ぼした影響である。

具体的には、函館の近代和風住宅に加賀地方の建築文化の影響（建築彫刻のモチーフおよび井波彫刻の伝播）がみられた点（『函館・橋谷家に関する調査報告書』2023）、さらに白河の明治時代の町家建築に越後地方の建築技術の関わりが見いだせるなど、明治時代の東北地方および北海道を含めた地域間交流の実例を深めることができた。こうした各地の地域間交流の建築文化史の叙述の試みは、身分制が撤廃され、また人物の地域移動が多様化する明治時代ならではの切り口として、本研究で重視する論点である。井波彫刻の欄間は、前述の水沢城下町で、昭和初期に増築された旧高野家住宅「古稀庵」でも確認され、近代和風建築の展開を物語る重要な視点である。また、函館で修業した大工棟梁・堀江佐吉が故郷の弘前城下町で明治の建築作品を手がけていくこと、あるいは札幌で活躍した大工棟梁・花輪喜久蔵が岩手・宮城の寺院建築を北海道仕様も取り入れながら手掛けていくこともあわせて、東北地方の近代建築の展開における北海道の重要性も把握された。

研究成果の第三は、「郷土人脈」の視角である。

この視角は、水沢三大偉人（高野長英、後藤新平、斎藤實）を輩出した城下町・水沢の建築群の調査研究を通して明確化した論点である。これら三大偉人と呼ばれる人物は、地域史・人物史としては著名で既往研究も蓄積される。一方で本調査研究を通して、郷土の水沢にゆかりの建築が残される点、しかもそれらが互いの顕彰活動から積極的に保存・整備されたことを明らかとすることができた。たとえば、高野長英ゆかりの「旧宅」の保存に対しては、政治家・後藤新平の推進がみられたこと、さらにその後藤新平旧宅は、その没後に地域の顕彰運動の中で、保存整備によって武家屋敷の格式ある意匠が再構成されたこと、高野家住宅と斎藤實ゆかりの建築「斎藤子爵水沢文庫」に、共通する建築家・岡村潤治（東北帝国大学技師）の存在が判明したことなど、郷土の人脈が生みだした建築群を、統合して評価する視角を提示した。

最後の第四に、「技術伝承」である。

この視角は、地域に伝来する大工道具研究（「気仙大工左官伝承館の職人道具アーカイブ研究」2023）、そして大工家に伝わる大工文書の分析（「起し絵図の多彩な形式と機能」「伝統的な図面表現と建築の近世・近代」、2022）を通して把握された。大工道具研究において、明治時代を中心として気仙大工を輩出した陸前高田に伝来する二千点を超える大工・左官道具のアーカイブを通して、その作風と道具の連環を把握する試みである。たとえば、戸袋や仏壇・神棚などの細部意匠に精緻な彫刻を凝らす気仙大工の作風が、仕上げ系匏の多様なコレクションと対応するなどが把握された。地方の建築技術・意匠的作風と職人道具との関係性を探求する論点は、本研究期間中はアーカイブ作業（目録化）に注力した面もあって、今後の研究課題として継続していく。また、大工文書研究を通して、代々の大工家に伝来する史料形式の検討も行った。たとえば数寄屋大工家に伝来する起こし絵図に着目した。従来、この起こし絵図は立体化できる図面という側面が重要視されてきたが、むしろ、各家の伝承性・秘蔵性ゆえの畳める意義も有する点など、大工文書の史料形式と技術伝承の関わりについて論じている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 中村琢巳	4. 巻 Vol.35 No.1
2. 論文標題 気仙大工左官伝承館の職人道具アーカイブ研究	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東北工業大学地域連携センター・研究支援センター紀要E0S	6. 最初と最後の頁 71-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 中村琢巳・太齋里捺・木村崇之	4. 巻 34
2. 論文標題 弘前市仲町伝統的建造物群保存地区における地域協働型の木工看板デザイン	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東北工業大学地域連携センター・研究支援センター紀要E0S	6. 最初と最後の頁 103-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 中村琢巳	4. 巻 -
2. 論文標題 伝統的な図面表現と建築の近世・近代	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東北歴史博物館「伝わるかたち/伝えるわざ - 伝達と変容の日本建築」	6. 最初と最後の頁 127-129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 中村琢巳	4. 巻 -
2. 論文標題 起こし絵図の多彩な形式と機能	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東北歴史博物館「伝わるかたち/伝えるわざ - 伝達と変容の日本建築」	6. 最初と最後の頁 110-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村琢巳・工藤汐渚	4. 巻 33
2. 論文標題 城下町登米まるごと建築博物館プロジェクト	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 EOS	6. 最初と最後の頁 145-150
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 中村琢巳
2. 発表標題 部材の持続と循環からみた近世民家
3. 学会等名 日本建築学会都市史小委員会シンポジウム「都市空間の物質性 (マテリアリティ)」 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大友侑果・中村琢巳
2. 発表標題 旧仙台藩人首の近代和風建築・佐伯家住宅に継承された私塾の空間特性
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演 (北海道)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大友侑果・中村琢巳
2. 発表標題 旧仙台藩人首の近代和風建築・佐伯家住宅について
3. 学会等名 日本建築学会東北支部研究報告会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 千葉璃乃・中村琢巳
2. 発表標題 五所川原市の重要文化財・旧平山家住宅の「離れ」について
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演（近畿）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 武見理々華・中村琢巳
2. 発表標題 大石武学流庭園「瑞楽園」における近代和風建築と庭園 - 昭和の改庭に伴う農家の改造 -
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演（近畿）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 中村琢巳・河内聡子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 奥州市教育委員会	5. 総ページ数 42
3. 書名 奥州市文化財調査報告書第1集 旧高野家住宅（高野長英旧宅・古稀庵・新座敷ほか）	

1. 著者名 野村俊一（編）・中村琢巳ほか9名（執筆）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 209
3. 書名 伝達と変容の日本建築史 - 伝わるかたち / 伝えるわざ	

1. 著者名 中村琢巳・阿部正・竹内泰・田代亜紀子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院	5. 総ページ数 36
3. 書名 函館・橋谷家に関する調査報告書	

1. 著者名 中村 琢巳	4. 発行年 2022年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 256
3. 書名 生きつづける民家	

〔産業財産権〕

〔その他〕

伝統建築ミュージアム https://www.takumi-lab.com/

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関